〔草人木上〕一立水打事は、薄茶過て炭の節打也、又薄茶の前に炭あらば、薄茶の内に打べし、此立水といふことを近き比仕出し候也、其已前はかつてなき事也、由來はおくにあり、

一歸宅の時は、座敷にてたがひに禮をいたして、亭主は勝手へ入、障子を立べし、客立樣に、床の内と棚などの物の置合を見べし、

一路地へ出たり共、にげ口の樣にすべからず、置たる道具共失念なき樣に、萬の置目ちがはざるやうに、跡にて人にわらはれぬやうに、たとひ水打に出たる男共のえわざ成共見て、惡き事はなをしてかへるべし、くゞりの口をば本より跡より出る人戸をえめて、初のごとくに亭主の出る迄はならびゐて、えづかにたがひに禮をなすべし、いかに心安き中成共、取わき客方は謹悉體をなすべし、終日のくらうは、たがひの身に覺あるならば、かへすゞ客かろく禮をなすべからず、

〔細川茶湯之書下〕一宿へ歸、大略自身禮に行、えからずば書中にて御茶の禮、御道具拜見の體禮を申なり、

後禮

〔茶道便蒙抄客方〕炭所望の事

一後の禮の事、主客共に互の宅へ參り禮あるもの也、心やすき間は、其座にて禮に參るまじきよしを約束致し、書狀使も取かはすまじきといひ合する事もあり、主客位を心得べし、

一名物の道具出たる時は、縱互に禮なき筈に申合たりとも、翌日必禮に行、名物拜見致し過分の由、謹て禮可有之也、是我壹人の名物ならず、天下の名物たるゆへなり、

對貴人式

〔備前老人物語〕ある人茶湯に貴人のあいしらいといふことは、さのみはなしといひけるに、いやいやえかはあらず、禮の外なる事はなし、その上茶いりの袋といふものは、なにゆへにか、つくれるにや、貴人を請ぜる時は、その御前にて茶入のふくろの封をきる習ある也といひけり、

〔茶道織有傳上〕亭主の大體又曰、主人に茶奉る時は、今やき新茶わん、臺天目に用、唐物にあらずとも盆たて也、口傳、